

## 巻頭言——多様な生活文化の中の雑穀（特集）

このくにはユーラシア大陸の極東に位置し、海洋に囲まれながら、多数の巨大都市や工業地帯を構築した今日でさえ、ありがたいことに領域の約64%が山林に被われている。島ぐにであると同時に山ぐにであるという特異な自然環境に立地している。台風や地震などの自然災害は多いが、このことを忘れずに、禍福転じて暮らせば、平常時にはとても穏やかで豊かな自然環境にある。

大陸から直接東漸して、あるいは花綵列島を伝って間接的に南下あるいは北上して、次々と多様な民族がそれぞれの生活文化をもってやってきて、定住した。島々の先は太平洋だから、この先には行けなかった。豊かな自然は行く必要も感じさせなかったのだろう。約1万年前に農耕文化が獲得された後には、栽培植物を含む農耕文化複合も伴って移住してきた。

この見方からすれば、このくには、ヤマト族だけではなく、アイヌ、オロッコ、ギリヤーク、朝鮮族などの混合民族によって構成され、山住の縄文文化の系譜をうけた畑作農耕から、平住（低地）の弥生文化の系譜による水田稲作農耕へと歴史的に進展してきたと考えられる。農耕が始まる以前の無土器文化であれ、その後の農耕文化であれ、このくには生活文化は途切れることのない時を経ながら重層的に蓄積されてきたはずだ。

ところが、第二次世界大戦後、何故か、柳田国男による日本の単一民族論、平住（低地）の弥生文化の系譜のみを重視する水田稲作農耕が優勢になった。これが今日の日本の農業や農耕のあり方を著しく歪め、父祖以来の食糧自給の努力を捨て去り、食糧輸入に依存する体制に導いた思想の一つであると考えられる。江戸時代の米石高制に加えて、明治維新の殖産興業、戦時中の米配給制度、アメリカに敗戦した後の小麦・脱脂粉乳などの食糧援助が、この国の人々をし

て、独立心を喪失した「米悲願単一民族」に仕立て上げた。柳田の思想の一部、微瑕が拡大解釈されて、この政策に与したのだろう。

人間も生き物であるから、食料の安全・安心確保は第一の欲求である。ところが、この国の政策は食糧安全保障を放棄したのである。水田稲作のみに集中した結果の米の過剰生産を減反の強制によって対応した。生産を放棄することに対して補助金を出したのである。稲の多収よりも安全・安定生産、畑作の麦・雑穀の生産も維持すべきであった。世界的な人口激増や環境変動のもとで、不安定な食糧生産と需要の拡大によって、海外からの食糧輸入に全面的な依存はできない。この国が農業生産を軽視し、食料安全保障を怠っているのも、多様な食料の安全・安心は家族で、地域社会で確保せねばならない。

私の第2の人生は、ユーラシア大陸各地および日本各地への旅に多くの年月を費やした。インド（バンガロール、農科大学）とイギリス（カンタベリー、ケント大学）の地方都市にはサバティカルで、タイ（バンコック、ラジャバト・プラナコン大学）には大学院の集中講義などで、しばらく暮らす機会を得た。このため、とりわけインド農村の暮らし、西欧の農村景観から大きな心象を受けた。第3の人生では、旅で観たこと、考えたこと、旅の後の調査研究の成果をアーカイヴすることにした。

この第9号はユーラシアの旅でたくさんの農家から分譲を受けた栽培植物の種子・標本を用いた実験研究の成果をまとめた。研究の一部は東京学芸大学民族植物学研究室のインド雑穀研究チームの成果である。彼らの卒業論文や修士論文の成果は各自のものであり、いずれ彼らが公表することを願いながら、ここでは概要を未発表として記録しておく。

木俣美樹男（2015-9-24）

